

## 千年期と患難期

### 一 患難期の重要性

キリスト教終末論においては、「千年王国」の解釈が議論の焦点となつてきた<sup>(1)</sup>。「千年の王国」は、キリストの再臨の前か後か、あるいは初臨すでに始まつてゐるのかなど、この問題はさまざまな角度から論じられ、すでに膨大な数の研究書が出版されてきた。たしかにこの問題は、神の国の現在性と未来性の理解に關わる重要なテーマである。しかし、千年の教会史を振り返るとき、議論があまりにもこの点に集中し、その陰に隠れて、もうひとつ、おそらくより重要な側面の考察が見落とされてきたのではないだろうか。その看過されてきた論点とは、終末的な神の民の苦難の時、いわゆる「患難期」の問題である。

岡山 英雄

## 患難期と教会（默示録の終末論）

「Jの期間について、黙示録は、一～三章で、三種類の表現におこし、五回語及してゐる。

「四十二か四」（一一・一／一三・四）

「一一六〇四」（一一・三／一一・六）

「一時と一時と半時」（一一・一四）。

黙示録では三、四、七、十、十一などの限られた数字が、象徴的な意味を持つて、繰り返し現れるJのを鄰ねむる。Jは注目すべき期間である。（黙示録における数字の象徴性について R. J. Bauckham, *The Climax of Prophecy: Studies on the Book of Revelation*. (Edinburgh: T. & T. Clark, 1993) P.29-37. を参照せよ）表現は黙なつてゐるが、Jは、の期間は、一母を二六〇四とするか、「三年半」のこの間が黙れる。やつて、この注解者が認めてゐるJは、Jは、Jは、ダニエル書の「ひと時とふた時と半時」（七・一四）との関連から、終末における神のJの苦難を象徴する同一の期間を指してゐる。<sup>2)</sup>

黙示録によれば、Jはキリストの来臨に先立つ神のJの苦難の時であり、それは一章から三章の記述にJがあり、一七章から一八章の大バビロノの物語、また六章、八章から九章、一六章の封印・ラッパ・鉢の三つの災事も結びついて、四章から一八章全体に関わつてゐる。（「三年半」はまた、最終的審判に先立つ、三つの災事の部分的審判を通して、神が人間に警告をJれる時であり、前触れとしての裁きによって、人々が悔い改め、神に立ち返る機会をJれる時である。）Jに對し、黙示録において、千年期への言及はきわめて少なく、一〇章の一節から一〇節に限定されてゐる。内容の多様性、記述量の豊かさ、その独自性から考へても、黙示録において、「三年半」（一～三章）が「千年」（一〇章）よつばるかに注目すべき期間であるJは明らかである。

### 進歩主義的歴史観

Jのよ／＼に患難期は重要な期間であるにもかかわらず、千年期に比べて軽視され、その研究はJこれまで充分になされてこなかつた。その理由として、教会史において支配的であった樂觀的、「進歩主義的」な歴史觀があげられる。Jの歴史觀が顯著になつたのは、四世紀以降である。四世紀まで教会は、小さく弱く、ローマ帝国の圧倒的な権力の中で、少数者として、中傷され、迫害される存在であつた。彼らは、自らがすでに患難の中にあり、やがてより大きな患難の来るJことを知りつつ、殉教をも恐れず証言を続けた。彼らはJ現実の惡の力を完全に打ち破るキリストの来臨は、切なる願いであつた。

しかし四世紀初頭の大迫害の後、コンスタンティヌス帝のキリスト教公認、さらに国教化によつて、事態は大きく変化した。教会は国家と一体化し、多数者となつて、勝利し、世界を支配しつつ拡大し、神の國を地上で実現する存在となつた。（J・モルトマン「神の到来 キリスト教的終末論」J・モルトマン組織神学論叢<sup>5)</sup> 新教出版社、一九九六年、一三三三～一三二二頁を参照せよ。またJのよ／＼に優れた分析にもかかわらず、モルトマンはJの書において、患難期について、全く言及していないことに注意せよ。）その結果、終末論も大きく変質し、キリストの来臨への切実な待望は失われ、地上の患難期は實際的な意味を持たなくなつた。

Jのよ／＼な進歩史觀は、カトリック教会の成立と発展にともない、「公認」の見解となり、中世を支配し、また宗教改革においても、ルター、カカルヴァンも終末論に關しては、中世の基本的な枠組みをほぼ踏襲した。またJの樂觀的な歴史觀は、「西欧」キリスト教社会による世界の「文明化」という植民地支配的な宣教論へと展開した。さらに近代の「啓蒙」思想によつて、その哲學的な支持を得て強化され、また生物学における進化論の強い影響も受け、科学の発達にともなう「技術的ゴートピア」（H・スワールマン「技術文化と技術社会」（すぐ書房、一九八四年））の

真）への信仰と繋がつてこりつた。

#### 千年期後再臨説

「Jのよひに患難期を過小評価する傾向は、キリスト教終末論」において顕著である。Jの説によれば、教会の黄金時代、地上の「千年天国」の後J、キリストが来臨する。 (S. J. Grenz, *Millennial Maze: Sorting Out Evangelical Options*. (Downers Grove: Inter Varsity Press, 1992) P.65-90. を参照せよ) 基Jの由来や、終末論患難に陥る頗るのせじえせ、Jの由のHとかコマ崩壊に成就したJ歴に頗る極がこる。 (J.J. Davis, *Christ's Victorious Kingdom: Postmillennialism Reconsidered*. (Grand Rapids: Baker, 1986) P.114. を参照せよ) またD. Chiltonたるのコトハベトトクハマハ運動も同様の患難期理解に基づいてる。Jだのもわめし一面的な歴史観においては、来臨論の患難期が意味を持たなくなるのは当然である。しかし、Jの説せ、オリーブ山でのイエスの「苦難の由」についての預言、パウロの「困難な時代」についての警告（トマト二章）、黙示録の「獸の國」との戦いくの備えを無視したものであり、偽りの「平安」に神の民を假住せかるやのれい（Hシリヤカ・一回・一三・一三ト一六）。

一九七四年のローザンヌ会議は、キリスト者の「社会的責任」の意義を指摘したが、画期的なものであったが、終末論的な考察は十分であるとは言えない。とりわけ患難期や黙示録についての言及がほととじないのは、ポスト・コンスタンティヌス主義を超えるJとの困難だ、また西欧近代キリスト教進歩史観の持つ限界を示してこねと思われる。

患難期における教会のあつたを再現するJは、教念とは何か、世界とは何か、歴史とは何かを問ひJなりである。一方、患難期を強調するJ、歴史的な悲觀主義、敗北主義に陥り、やのよひは逃避主義は「社会的責任」の放棄へと任」を果たすJとあら。

#### 「ディスペンセーショナリズム

「Jのよひに患難期が千年期に比べて軽視されて来た中で、患難期についての詳しこ研究は「ディスペンセーショナリズム」の神学者たちによってなされてきた。Jの神学は十九世紀半ば、イギリスのJ・ダーリングによって唱えられ、二十世紀にアメリカでファンダメンタリズム運動と結びついて急速に盛りあつた（Grenz (1992) p.91-125）。Jの神学は、預言の研究に力を注ぎ、聖書の歴史性を強調し、終末への関心を呼び起Jしたところでは大きな意義を持つが、ひとつ根本的な問題をはひてJいる。それはその特殊な終末論、とりわけ「患難期前撲撃説」である。彼らは、教会トイスラエルを峻別して、患難期に、教会は撲撃されて天にあり、イスラエルは地上に残されるとする。Jの説に立つなら、いかに患難期の種々相を詳しく研究したとしても、それにはすべて、単なるカレンダー的興味か、世界歴史のこれから動向を予測するという枠を抜け出るJとはできない。なぜなら天に撲撃された教会にとって、地上の患難期は本質的に無関係であつて、その結果、患難期と教会の関係、もしくは地獄の中にある教会のあり方にについての分析が全く欠落してしまつたのである。

患難期前撫拳説が新義約に成つたれ體なことより説コトせば「おどり下さるハーブの一大日の時代の體神があつて（G.E.Ladd, *The Blessed Hope*, (Eerdmans, 1956)）」めたるの後、R. H. Gundryの「*The Church and the Tribulation: A Biblical Examination of Posttribulationism*, (Zondervan, 1973)」も「*The Rapture: Pre-, Mid-, or Post-Tribulational?*, (Zondervan, 1984)」にこの優れた論文集も出版されたので詳細な省略あるが（特上記の母のD.J.Mooの論文P.169-211参照）<sup>(4)</sup>

- いくつかの重要な点のみを指摘する（<sup>(4)</sup>）
- (1) 患難期前撫拳説は、教會史においてもわめて歴史の浅い特殊な説であつて、初代教父から中世、宗教改革を経て十八世紀に至るまで、このよつたな終末論は存在しなかつた。（近年この説は大きな変化があつて、漸進的「ディスペンセーションナリズム」と呼ばれる説をとる者たちは患難期前撫拳説を不可欠のものとは考へなくなつて）
  - (2) 默示録の記述のはじんじは、患難期にかかるものである。患難の時代における神の民のあつた、警告と励まし、戦いと勝利などが、この書の主題である。（患難期前撫拳説をとる者は、默四・一で教會は天に撫拳され、四章以下は地上に残されたイスラエルのためのものであるとするか（「フルガーブ」）、現代の主要な注解者は、このよつたな解釈を支持する者はいない。）
  - (3) マタイ一四・一～三一章、反キリストの出現、患難期、続いて再臨とこの終末的順序を示唆している。
  - (4) 「サロ二ケ一・一～二」によれば、教會は、反キリスト（不法の人、滅びのト）の支配する患難期を通つて再臨の主に会ひ、「まよひ背教が起つて、不法の人が現れなければ主の日は来ない。」（「トキ一・三」）。
  - (5) 患難（θλημα）の用例を見ねば、患難は教會にとって避けねばるべきものではなく、教會の地上における本質的なあつ方である（ロマ四・三一～二章）。「コハント四・一七」（たゞバビロニアの預言「あなたがたは世にありては患難が

## 一 患難期と神の民

### 神の民の迫害

あつまつ（四福音一六・三三）や、パウロの警句「私たのせしののみな苦難に余るがために」（「テサ二二・二」）など、神の民は「必ず争ひを経て」（使徒一四・二二）、「地獄よりて煉ひれ、清めひれ、純化されじ」（路加六・一〇、タ二一一・三五）、「セカツヤ一三・九、マハキ三・一・三」）、「神の国に入り、再臨の主に会ひ」。

### 「大淫婦」（一七～一八章）によつて描かれる。

「これらは悪の諸力を統括する「悪魔」は、「大きな赤い龍」ひとつ描かれるが、彼は天から投げ落とされ、「自分の時の短い」と（一一・一一）を知つて、激しく怒り、「女」そして「女の子孫」（神の民）に戦ふを挑み（一一・一七）、血の手と大刀をもつて、彼女を攻撃する。

「龍」は「海から上つて来る獸」に血の「力と位と大きな權威」（一三・一）をもつてゐる。この「獸」は、神をけがし（一三・六）聖徒たちに打ち勝つが、あらゆる「部族、民族、國語、國族」を攻撃する（一三・十七）。この

「海の獸」は、政治的権力、軍事力による支配を象徴するが、「地から上がりて来る獸」（一三三・一）は、「ニセ預言者」（一六・一三）とも呼ばれ、宗教的権威による支配を表す。この「地の獸」は、「海の獸」の持つ権威を働くが（一三・一）、「わざわざな奇跡」によつて人々を惑わし、「海の獸」の像を造り出せ、それを礼拝せよ、従わない者を殺せよ（一三・一四）。またすべての人に「獸の刻印」を受けねば、それを持たない者の商品の売買を禁止する（一三・一七）。

また「海の獸」は「緋色」であつて、「大淫婦」をその體に兼ねる（一七・一三）が、彼女は「大バビロン」（一七・六）と呼ばれ、地に住む人々を「不品行の淫い酒」で酔わせ（一七・一）、地上の王たちを支配（一七・一八）商人たちを富ませるが（一八・一三）、聖徒たかひマニスの証人たちの血に酔い痴れる（一七・一九、一八・一四）。彼女は、経済的な繁栄と道徳的頽廕によつて、偽りの陶酔と人々を誘つ込む。

これら三者（獸、ニセ預言者、大バビロン）は緊密に結びあつて、根源的支配者である龍（サタン）の邪悪な目的を地上で達成するために、神の呪を、政治的栄光、宗教的奇跡、経済的繁栄の三つの側面から誘惑し、攻撃する。（特に経済的側面）<sup>5</sup> Bauckham (1993) P.338-383 を参照せよ。」「龍」を領めたこの三者は、神に敵対する靈的存在として、その本質を回つてゆく。ハラマケデンの戦ごとおこして地上の王たちを集めるために「竜、獸、ニセ預言者」の口から出たのは「かえりのよひな汚れた靈、しゆつを行ひ悪靈ひやの靈」（一六・一三）であり、倒された大バビロンは「惡靈の住まご、汚れた靈の巢窟」（一八・一）であった。「三年半」は、この三つの悪の諸力が結託して、神の呪を激しく襲し、迫害する時である<sup>5</sup>。

### 神の民の保護

しかし激しく迫害のせども、神の呪せ脱金せしむれど、「四十一か四」の間、聖所の「外の庭」は異邦人によつて踏みこづられるが、「神の聖所と祭壇」をいじめ拂つてこぬ者、は、運づやねじよつて運ひれ、立たれど（一・一）。また「女」の産む「男の子」（キリスト）が、彼を食つて呪へしむる「龍」から逃れ、大わしの翼を剥えられ、荒野へ飛んでゆき（一・一・四～五）、「女」（教会）もまた、激しく迫害する「龍」から逃れ、大わしの翼を剥えられ、荒野へ飛んでゆき（一・一・一・四）、「神によつて備えられた場所」で「一・一・六〇四」の間（一・六）「一時と一時と半時の間」（一・一・一・四）かくあわれ、養われる。キリストが神によつて守られたよひに、キリストの教派もまた神によつて完全に保護せられる。回つて「ふたりの証人」（神の呪）は、預言をこして、「一・一・六〇四」の間（一・一・三）「彼らに害を加えよつとある者」の手から完全に守られた（一・一・五）。このよひに神の守つせ、迫害のせども完全である。

### 神の民の証言

これらの「三時半」は、神の呪が侵蝕的に、迫害せられたる保護されたるのみならず、積極的に困難のせども証言を続ける期間でもある。「ふたりの証人」の名が、この側面を最も鮮やかに描かれてる。彼らは、「一・一・六〇四」の間、「一本のオーバーの木」、「一の燭台」として、全地の王の御前で預言するが（一・一・四）「証言のため」火によつて敵を滅ぼし、天を閉じ、水を血に変え、災害によつて地を打つ力を与えられている。彼らの証言は、邪悪な王アハブに対する預言者エリヤや、頑なな王バロに対する解放者モーセのような権威を、神から与えられてこる（一・一・五～六）。また神の民は、「死に倒れるがでもこの力を惜しおいしなく、小羊の血と四分たちの「証言のいじば」のゆゑに「竜」に打ち勝つ（一・一・一）。「竜」は、女子孫の残りの者、すなわち「神の戒めを守つて、イエスのあ

かし」を堅く保っている者（一一・一七）と戦うが、彼らは「戦う」となく、「竜」の手先でもある「大バビロン」の迫害の中でも、「イエスの証人」（一七・六）としての生涯を全うする。このように「三年半」とは、神の民が迫害の中でも保護され、証言を続ける期間である<sup>(6)</sup>。

### 三 患難期はいつか

#### 「三年半」の過去性

されでは、「三年半」とは「いつの」ことなのだろうか。それは、すでに過ぎ去ったのか、いま来ているのか、それともやがて来るのだろうか。この議論に關して最も重要なことは、これは必ずしも「者择一」的な問題ではないといつてある。「三年半」は過去、現在、未来のそれぞれに深く関わっている。このような「時」に関する理解こそが、黙示録の解釈、また聖書の終末論の核心にある。

まず、「三年半」は過去的な性格を持つ。黙示録が執筆された一世紀末、著者のヨハネは、ローマ皇帝デミティアヌス帝による迫害の中でパトモス島に流され、「イエスにありの苦難」（一・九）にあづかっていた。また同じ頃、ペルガモのアンティパスは「忠実な証人」として殺された（一一・一三）。忠実な二つの教会、スミルナとフィラデルフィアの教会はともに、ユダヤ人だと自称するが実はそうではない「サタンの衆衆」によつて「のしられていた」（一・九、三・九）。また第五の封印が解かれたとき、ヨハネは「神のことは自分たちが立てたあかしとのために殺された人々」（六・九）が天にいるのを見た。さらに海の獸、地の獸、大バビロンが、一世紀のローマ帝国の政治的、宗

教的、経済的側面を象徴していることは、多くの注解者が認めている。すなわち一世紀末、教会はすでに苦難の「三年半」の中にあつた。黙示録は何よりもまず、患難の中にある同時代のキリスト者を慰め励ますために書かれた。その意味で、終末的な患難の時は、ヨハネがこの書を書き記した時、すでに来ていた<sup>(7)</sup>。

#### 「三年半」の未来性

またこの「三年半」は過去の苦難を指すとともに、未来の苦難をも意味する。終末において神の民を迫害する悪の力は、一般的には「反キリスト」（一・ヨハネ一・一八）また「荒らす憎むべき者」（マタイ一四・一五）「不法の人、滅びの子」（「ナサ一・三）、「海からの獸」（黙一三・一）などと呼ばれているが、彼は一世紀のローマ帝国の強大な国家権力を象徴するとともに、やがて来臨直前に現れる巨大な悪の力をも指し示す。黙示録一七章によれば、この「獸」は「今はいない」、そして「やがて」底知れぬところから上つて来る（一七・八）。この未来性は同じ節で再度強調されている。この「獸」は「今はおらず、やがて現れる」（一七・八）。また彼は「七人の王たち」のひとつとしても描かれているが、この七番目の王は「まだ来ていな」（一七・一〇）。この「獸」は「三年半」の迫害の中心的な存在なので、「獸」の未来性はすなわち「三年半」の未来性を意味する。やがてこの「獸」は「竜」や「にせ預言者」とともに、全世界の王たちをハルマゲドンの戦いのために集めるが（一六・一一・一六）、これがキリストの来臨に先立つ、未来的、終末的な戦いであることは広く受け入れられている。すなわち黙示録は、執筆された当時の一世紀の困難な時代を「三年半」と見るとともに、未來の来臨直前の全世界的な迫害の時代をも「三年半」と呼んでいる。

## 「三咲半」の現在性

「三咲半」は過去性と未來性の双方の要素を持つが、この點はやれども、やがていつの間に現在性を持つ。神の民の苦難は、一世紀や、来臨直前に限られるわけではなく、教会の全歴史を貫いて普遍的である。眞の教会は、どのよのうな時代においても常に患難の中にゐる。「三咲半」を過去的であるとは未来的に解釈するなど、かなりの程度まで外義通り、実際の三咲半として理解するよりもむしろ、こかしそれを「千年近くキリスト教史と関連づけるなど、当然のことながら、「三咲半」は文外通りではあるべき、象徴的な期間となる。

「三咲半」の現在性、全教会史との関係を強く示唆するのと、「ふたりの証人」が証言する點と、三咲半（一一・三）である。おひこ、「ふたりの証人」は終末に現れるふたりの特別な人物と理解するよりもむしろ、G. E. Ladd, *三咲半の説を解説*（*A Commentary in The Revelation of John*, (Grand Rapids: Eerdmans, 1972) P.154 を覗く）三咲半の解釈を支持するものではなく、むしろ彼は、「二つの燭台」とも呼べておつ、「燭台」は「教会」である（一一・一〇）と説明されてゐるところから、教会論的な理解がふれわなつこ（Beale (1999) P.572-585）とするなど、この「三咲半」は、地上に立ちいたれた神の教会が、「世の光」として福音を継承する働きの全体を示してゐるといふになつ、おひこ時代の、教会の証人としての役割に關係してゐる。

わいに患難（θλίψις）の用例（新約聖書で四十五回）は、未来の大きな患難が、現在の苦難と質的に連続していくことを示唆する。やがて来る未来の患難を意味してゐる用例は四回あり、それらはオリーブ講話において現れるが（マタイ一四・一・一九、マルコ一三・九、一四・一九）、他の四十回の用例はすべて、すでに起つてゐる患難を示す、また「陣痛」をも意味する（ヨハネ一六・一一）。わなわち終末の大患難は、初代教会が受けた、また全時代の教会の受けてこたる苦難と、質的には連続している。来臨の前に、それまでは局地的であった迫害が、全世界的な規模

に拡大し、かつてなかつたほどに激化する。しかしその違いは、量的なものであつて、質的なものではない。

「三咲半」は、やがて来た過去の期間、来つてある現在の期間、やがてやがて来る未来の期間を意味してゐる。「歎」は一世紀のローマ帝国であるとやら、世界史の中でたびたび現れた自己神格化した国家でもあり、また来臨直前の大患難期に現れる全世界を支配する反神的な権力でもある。「三咲半」に象徴される患難とは、黙示録が書き送られた一世紀の教会の現実であるひとよし、おひこ時代において真の教会が地上で直面する苦難の総称でもあり、またその頂点としての来臨直前の全世界的な大きな患難でもある。神の国が現在性と未來性の二つの面を持つこと、あど上詳しへ語つられて来た。（G. E. Ladd, *The Presence of the Future: The Eschatology of Biblical Realism*, (London: S.P.C.K., 1974) P.23-42, 149-170 を参照せよ。）つかし患難期の持つてゐる多様な時間的側面について、われわれはいざん挿入されてしまつ。（患難期前携挙説は「三咲半」の未來性のみを強調し、また千年期後再臨説は「三咲半」の過去性のみを強調して、それぞ他の重要な側面を見落としている。）黙示録が書かれたのは、一世紀末、強大なローマ帝国の支配の中で、少數者として苦しむ神の民を励ますためであった。しかし同時に、それは困難な戦いのなかに生きる全時代の神の民を奮い立たせ、また終末の患難の時代に向かひ、神の民を訓練し、整へ、備えてゆくためのやうである。

## 苦難から光へ

このように黙示録の終末論、いや聖書の終末論の核心にあるのは、患難期における教会のあり方への深い洞察に基づいた励ましである。患難期において、教会は迫害を受けるが、その中でも神の保護は完全であり、福音を続けて、殉教をも恐れる」とはなし。また神の国と歎の国、光の支配と闇の支配、神の民の祝福と患難は、キリスト教終末論

を形成する」<sup>1</sup>つの要素であつ、双方を視野に入れる「しなくて」、真に聖書的なダイナミックな終末論を構築する」<sup>2</sup> 信じねど。（H. Berkhof も鋭く歎く「洞察よりも」<sup>3</sup> 両者の対照の重要性を指摘した。）<sup>4</sup> Christ the Meaning of History. (1962) Tr. by L. Burman (Grand Rapids: Baker, 1979) P.101-177.）既往の成績を続けていた「被」<sup>5</sup> と「毒液」（マタイ 13: 11〇）<sup>6</sup> は、各種の嘘をばく、それわれの本質的な特徴をあらわす。最終的な「対立取つ」を論じ、神の国と獸の国が鋭くせめあう、光の国と闇の国との戦いが激化し、その究極の姿を明らかにする。これまで臨前の患難期において、両者はその相違を明確にして、地上の民は、神の民と獸の民とに一分されてゆく。獸の民は、大バシリコフの不品行の「黄金の杯」（黙 17: 4）かい飲み、「獸の刻印」（黙 13: 16）を取るが、神の民は、キリストの血による「新しい契約の杯」（1コ 11: 25）かい飲み、また、「神の知」（黙 11: 11）を語り記される。

イエスが十字架の苦難を経て、復活の栄光を受け、天に着座されたより、キリストの教義や、地上の患難を通して、栄光に輝く天のエルサレムの門をくぐる。「三年半」の苦難において、キリストの十字架の苦しみにあやかつた者が、「千年」の祝福、キリストの復活のこころにあやかふ。神の民が地上に受けた「今のこの世の難い患難」は、やがて天の「測り知れない重い永遠の栄光」（1コハ1: 17）くじ度えられていこう。

やがてキリストの来臨によって闇の力は完全に滅ぼされ、すべてが新しくされ、神の栄光のみが輝きわたる。しかし主の来臨までは、「三年半」の間、一時的に獸の国が勝利し、支配つてこゆかのものと見えた。それが神の国は、再臨までは、地上において、小羊の王国、苦難の王国として逆説的に表わされる。苦難と結び付かれた王国、パトモス島で、曰ハネば、おれよやの王国の真実を知つた。

「私曰ハネば、あなたがたといひや、イエスにある苦難の王国の祝福にあすかうてこ。」（黙 1: 9）

暴力化が進む現代において、患難期の研究、特に患難期と教会との関係の終末論的考察は、急務であるにもかかわらず、特殊な神学と結びついた終末論や、世界の「進歩」を信じる楽観的歴史観の影響によつて、軽視されてしまった。その結果、日本のみならず、世界で、1Jの問題に関する本格的な研究はまだなされていない。しかしキリスト教終末論の最大の課題とは、患難期における教会のあり方を明らかにすることである。19世紀後半、日本の教会、特に福音派は、アメリカのファンダメンタリズム運動の特殊な終末論の強い影響下にあつた。また一方では、ポスト・コノスタンティヌス体制に貫かれた、「西欧」近代キリスト教「文明」社会の思想にも深く影響を受けていた。しかし新しい世紀を迎えてから、やせやしのよひな過去の「神話」に囚われるのではなく、終末に関する聖書の警告に真剣に耳を傾け、患難期の研究を深め、それによって、日本からの世界へ、独創的神学を発信することができるのではないか。

## 注

- 1) Jの讃文は「1000年HMT、イギリスのヤハ・ト・ハニコラード大学で講義された。黙示録の神学に關する學位論文 'Irony in Revelation: the Paradox of the Lamb's Kingdom and the Parody of the Beast's Kingdom' (4年7月) の第六章「千年と患難期」6-1節(翻訳・詮釋)を翻訳し、原筆したものがだね。(翻訳の多くは翻訳した)
- 2) G. B. Caird, The Revelation of Saint John. BNTC. (Peabody: Hendrickson, 1966) P.159. イスラエルの歴史においては、ヒコヤの祈りによるアハハの歴代の「三年半」の noe（一列 1: 7-1、18-1、ルカ 1: 15、ヤコブ 1: 17）や、ヒコヤの「アハハ」・ヒコヤの「三年半」の noe（一列 1: 7-1、18-1、ルカ 1: 15、ヤコブ 1: 17）や、ヒコヤの「アハハ」・ヒコヤの「三年半」の noe（一列 1: 7-1、18-1、ルカ 1: 15、ヤコブ 1: 17）
- 3) G. K. Beale, Commentary on Revelation. NGTC. (Grand Rapids: Eerdmans 1999) P.565-568. を覗む。

- (3) 「反キリストのイメージは、あるいは種類の進歩的コートピア主義と真っ向から矛盾する。それは全人類の歴史の共通の未来を、最終的に実現されるパワーダイスとしてではなく、遂に完成されるバベルの塔、人類の最も邪悪で、偶像礼拝的な性向のクローバーフィヤー<sup>三</sup>ハシコトに揺れ立つ。」 R. Bauckham, and T. Hart, *Hope Against Hope: Christian Eschatology in Contemporary Context*. (Darton: Longman and Todd Ltd, 1999) P. 114.
- (4) G. L. Archer Jr.の書の中で、患難期中携挙説（患難期を前半1/3分、キリストはその中間に現れる）は論じな。
- (5) 説）を主張してこなが、Jの立場を取る者はJの立場であるのJのJは論じな。
- (6) 注目すべきこと、竜、海の獸、地の獸、大淫婦の四者は、神の國を模倣している。特に初めの三者は、それぞれ父なる神、子なる神、御靈（によつて靈感された「ふたりの証人」）に対応しておつ、多くの法解者によつて「魔魔的三位一体」と呼ばれてゐる。やひ「大淫婦—大バビロン」や「聖なる花嫁—新しごヘルサレム」とは「女性—都市」ひとつ鮮明に対比されてい。
- (7) またこの迫害・保護・証言とこの三つの要素は、默示録のみならず、オリーブ講話においても顯著である。「いまだかつてなかつたよつた苦難の日」（マタイ一四・一一）に、神の民は苦しみに会こ、「憎まれ、また殺される」（マタイ一四・九、ルカ二二・一七）。しかし迫害の中でも神の守りは完全であり、「髪の毛一筋も失われることはない」（ルカ二二・一八）。神の敵は、たとえからだを殺すことはできても魂を殺すことはできない。やひこの迫害の時は、神の民が「証言をする機会」（ルカ二二・一三）となり、福音が「全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかし」される時となる（マタイ一四・一四）。すなはち終末の患難の日に関して、默示録の幻と福音書の預言とは、表現の形式は違つていても内容において深く結び合はれてゐる。
- 書簡の著者ヨハネも同様な終末觀を示してゐる。「今や多くの反キリストが現われてゐます。それによつて、今が終わりの時である」とがわかつてます。」（ヨハネ一・一八）